資料

道具的ならびに情緒的対人機能の提供と獲得が 関係への満足度に及ぼす効果

——女子青年を対象として——*

飛 田 操**

THE EFFECTS OF EXCHANGE OF INTERPERSONAL FUNCTIONS UPON SATISFACTION

Misao HIDA

We examined the effects of interpersonal functions given to and received from another upon satisfaction with the relationships. One hundred and sixty female junior college students rated the amount of instrumental and emotional functions given to and received from their father, their mother, and their best friend. They rated also the satisfaction with the relationships. As results of the analysis, it was indicated that satisfaction with the relationships was positively correlated not only with the interpersonal functions received from the other but also with the interpersonal functions given to the other. However, the patterns of these correlations were varied as the types of the relationships. On the basis of these results, some fundamental problems of the interpersonal relationships were discussed, and the importance of the "functional meaning" of the interaction partner was examined.

Key words : interpersonal function, satisfaction, "functional meaning," parents, female junior college students.

問 題

対人関係の機能としては、主として、道具的・手段的な機能と、情緒的・自己完結的な機能とが存在することが示されてきた。道具的・手段的機能（以下、道具的機能）は、ある目標の達成や課題の遂行のための道具あるいは手段として他者を位置づけたときにその他者がはたす働きを指すものである。従って、これは、他者との交流そのものの維持と強化とを目的とするという点で、当の関係自体に内在するところの表出的な情緒的・自己完結的機能（以下、情緒的機能）とは基本的に異

なった次元あるいは成立基盤を持つと考えられる（Bales & Slater, 1955 ; 永田良昭, 1973 ; 高木, 1983, 1984）。

なぜならば、Festinger (1954) の社会的比較過程の理論などから予測されるように、他者との情緒的結合に依存するような関係は、基本的には、経験・能力・技術といった資源における相互の類似性に基づいて形成されると考えられるのに対し、他者の道具的機能に依存するような関係の成立には、例えば Homans (1974) の社会的交換理論などから予測されるように、当の他者がこのような資源を相対的に多く保有していることが基本的に必要とされる、すなわち、それは自他のあいだの非類似性あるいは異質性に基づいて形成されると考えられるからである（永田良昭, 1973 ; 飛田, 1987）。

例えば、Parsons & Bales (1955) は、家族の機能として、道具的な機能と情緒的な機能が存在することを

* 本研究の一部は、日本教育心理学会第29回総会、および、日本グループ・ダイナミックス学会第35回大会において発表された。

** 福島大学教育学部 (Faculty of Education, Fukushima University)

指摘し、道具的機能は主として父親が担当し、情緒的機能は主として母親が担当するという機能の担い手の分化が生ずることを示している。

ただし、あるひとりの他者が、道具的機能と情緒的機能のどちらか一方の機能だけを高度に有し、他の機能は全く持たないというような対人関係は普通には考えにくい。基本的には相互の情緒的結合に基づいて形成されると考えられる友人との関係においても、ある程度の情報のやり取りや金銭的な援助といった道具的機能の交換が行われていると仮定することは日常の経験からしても妥当であろう。また、青年中期の男女において、知識や経験などの点からみるとより豊富な資源を有すると思われる父親や学校の先生に対して学業・進学についての悩みを相談する者の比率が母親や友人に対するよりも相対的に小さいという結果も(飛田, 1986)、他者の道具的機能だけに単独に依存するような対人関係は存在しにくいことを示唆するものであろう。

この点に関して、佐藤(1987)は、大学生を対象に、実際の友人に対する対人認知の構造と、友人がどのような機能をはたすことを期待するかという視点からみたときの対人認知構造とを比較し、実際の友人との関係は、道具的機能と情緒的機能のどちらか一方の機能だけに単独に依存しているわけではないことを示している。

また、高木(1983, 1984)は、家族・友人などの対人関係の機能と、テレビ・ラジオなどのマス・メディアの機能を検討したいくつかの調査データを再分析し、手段的機能(道具的機能)と表出的機能(情緒的機能)とは基本的には独立の次元としてとらえられるが、一方の機能を有する他者は同時に他方の機能を有することが多いこと、すなわち、機能的な統合が生ずることが多いことを指摘している。

このように、対人関係の機能について検討した従来の研究のほとんどは、その関係にある他者から提供される機能だけに焦点を当てて行われてきたといえよう。しかしながら、対人関係においては、人は単に他者から提供される機能に依存しているだけでなく、当の他者に対してもなんらかの機能を同時に提供しながら、その他者との関係を形成したり維持したりしていると考えられるのである。

永田照子(1985)は、家族との生活のなかで自分がはたしている機能についての女子短期大学生の自由記述を分析し、家族のなかで他の家族成員による代替が不可能であるような機能(特に、手段的機能)を遂行できう

ることが、その家族の情緒的な結合の要因として重要な影響を持つことを指摘している。

この指摘は、自分にとっての相手の機能的意味ばかりでなく、その相手にとって自分が占めるところの機能的意味の認知が、対人関係の成立や維持にとって重要な役割を演じていることを示すものといえよう。人は、自分にとっての相手の機能的意味と、相手にとっての自分の機能的意味の双方を同時に考慮しながらその他者との関係を形成し、あるいは発展させていくと考えられるのである(永田良昭, 1987; 飛田, 1987)。

もし、このような仮定が妥当であるならば、以下の仮説を導くことができる。すなわち、対人関係においては、その他者からある特定の機能を提供されることばかりでなく、その他者に対して自分もなんらかの機能を提供できることが、その他者との関係に対する満足度や、その人に対する好意に影響を及ぼしているだろう。本研究の目的は、この仮説を女子短期大学生を対象とした質問紙法調査によって検討することにある。なお、この考察から派生する次の点についてもあわせて検討する。

Rusbult(1980)は、対人関係に対する満足度は、基本的にはその関係において獲得される報酬と失われるコストとの差によって規定される、すなわち、獲得される報酬が失われるコストに比べて大きくなればなるほど、その関係に対する満足度は大きくなるとする投資(investment)モデルを提出している。もし、対人関係において、その相手に機能を提供することをコストとしてみなし、その相手から機能を提供されることを報酬としてみなしているのならば、この投資モデルから、相手に提供する機能と比べて、その相手から獲得する機能が相対的に多くなるほど、その関係に対する満足度は高くなるであろうと予測される。

本研究においては、加藤(1977)の自己開示の研究や、高橋(1968)の依存性の研究、今井(1987)の社会的勢力の研究結果などをふまえ、青年期の女子にとって重要な意味をもつと考えられる父親・母親・最も親しい友人という3種の対象人物との関係を選択した***。そして、それぞれの関係にある相手から提供される道具的機能と情緒的機能、および、その相手に提供することができる道具的機能と情緒的機能という4つの対

*** 加藤(1977)や高橋(1968)は、青年期における自己開示や依存の対象として、母親や友人が選択されることが多く、父親が選択されることはほとんどないことを示している。しかし、小野寺(1984)も指摘するように、青年期の女子にとって、父親との関係も、多くの面で重要な意味をもつと考えられる。

人機能の側面を同時に考慮し、これらの機能の提供と獲得がその相手との関係に対する満足度に及ぼす影響を中心に検討する。

方 法

本研究は、質問紙法調査によってなされ、対人関係において提供する道具的機能と情緒的機能、および、獲得する道具的機能と情緒的機能のそれぞれを測定するための対人関係機能評定項目が作成された。

質問紙の構成 質問紙は、①調査対象の年齢、きょうだいの数、出生順位を問うためのフェイス・シートと、②父親との関係に対する質問、③母親との関係に対する質問、および、④最も親しい友人1名との関係に対する質問という4種から構成されている。

父親との関係、および、母親との関係に対する質問は、最初にそれぞれについて、その存在の有無、年齢、イニシャル、調査対象者との同居・別居の別を問い、その後、それぞれについて対人関係機能評定項目への回答を求めた。また、友人との関係に対する質問においては、最初に「あなたが現在、最も親しく付き合っている友人1人を思い浮かべて下さい。最も親しく付き合っているのなら、その人は、学校が違っていても、同性であっても異性であってもかまいません。」という教示のもとに、その友人のイニシャル、年齢、同性・異性の別、その友人と付き合い始めてからの年数の記入を求め、その後、父親との関係、および、母親との関係に対する質問と同一の対人関係機能評定項目に回答させた。なお、②から④は、順序効果を相殺して呈示されている。

対人関係機能評定項目 対人関係の機能についての質問紙は、①その関係にある他者から獲得する道具的機能に関する尺度(以下、IR)、②その他者から獲得する情緒的機能に関する尺度(以下、ER)、③その他者に提供することができる道具的機能に関する尺度(以下、IO)および、④その他者に提供することができる情緒的機能に関する尺度(以下、EO)の4尺度からなっている。

すなわち、IR尺度は、「この人は必要な知識や情報を提供してくれる」、「この人は適当な人や機関を紹介してくれる」、「この人は必要な物を貸してくれる」の3項目、ER尺度は、「この人は私の立場を理解してくれる」、「この人は精神的な支えになってくれる」、「この人は私を受け入れてくれる」の3項目からそれぞれなっている。また、IO尺度はIR尺度に対応する「この人に必要な知識や情報を提供することができる」、「この人に適当な人や機関を紹介することができる」、

「この人に必要な物を貸することができる」の3項目、EO尺度はER尺度に対応する「この人の立場を理解することができる」、「この人の精神的な支えになることができる」、「この人を受け入れることができる」の3項目からそれぞれ構成されている。これらの尺度項目の作成に際しては、永田(1961)、藪内・渡利(1974)を参考にした。

また、この他に、それぞれの相手との関係に対する満足度に関する6項目(「この人との関係に満足している」、「この人とは気が合う」、「この人と一緒にいると楽しい」、「この人とお互いの気持ちをわかりあえる」、「この人と一緒にいると安心する」、「この人とは付き合いやすい」)が含まれている。さらに、この他に、関係に対する対等感に関する項目などいくつかの補足的項目が含まれているが、今回は報告しない。

これらの質問項目はすべて、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5段階評定法が用いられ、「全くあてはまらない」を1点、「非常にあてはまる」を5点として得点化した。

調査対象者と調査方法 質問紙は、1987年4月、私立女子短期大学生161名(範囲:19-20才)に対し、授業的に集団で施行された。このうち、父親との関係に関する分析と、母親との関係に関する分析には、両親がともに存在すると回答した153名のデータが、また、友人との関係に関する分析には回答不備な1名を除く160名のデータがそれぞれ最終的に用いられた。なお、回答は無記名で行われた。

結果と考察

調査対象者の属性 調査対象者の父親の平均年齢は50.3才(範囲:42-62才)、母親の平均年齢は46.8才(範囲:39-60才)であった。調査対象者以外にきょうだいがいない、いわゆる「一人っ子」は11名であり、きょうだいのいるものは142名であった。また、調査対象者がその両親の第一子として出生したものは103名であり、第二子以降に出生したものは50名であった。

友人の選択に際して、その性別を限定しなかったが、最も親しい友人として同性を挙げたものは135名、異性を挙げたものは25名であった。同性の友人の平均年齢は19.1才(範囲:18-26才)、異性の友人の平均年齢は20.8才(範囲:18-34才)であった。また、その友人と付き合い始めてからの年数の平均は、同性の友人との関係の場合が50.0か月(範囲:12-192か月)、異性の友人との関係の場合が22.5か月(範囲:2-49か月)であった。

対人機能評定 4つの対人機能尺度(IR・ER・IO・EO)

の信頼性を、父親・母親・友人という3種の対象人物との関係毎にそれぞれ求めたところ、各機能尺度のクロンバックの α 係数は.59～.84の範囲であった。特に、友人との関係におけるEO尺度の信頼性が.59、IR尺度の信頼性が.60とそれぞれ低く、このふたつの尺度の信頼性には、若干の問題があるといえよう。しかしながら、各尺度3項目という項目数の少なさを考えればほぼ満足すべき値であると思われること、また、対人関係の違いによる変動を明らかにするためには、同一の項目からなる尺度を用いる必要のあることから、ここでは、各尺度3項目の単純加算点をもって、それぞれの尺度値とした。

TABLE 1 に各機能尺度値の平均と標準偏差を示す。まず、父親に対する機能評定と母親に対する機能評定の平均値のあいだに差があるかどうかを検討したところ、IR・ER・IO・EOのすべての尺度において、母親との関係における評定の平均値が父親との関係における評定の平均値よりも有意に高かった(各々、 $t=-2.53$, $df=152$, $p<.02$; $t=-6.35$, $df=152$, $p<.001$; $t=-7.03$, $df=152$, $p<.001$; $t=-5.76$, $df=152$, $p<.001$)。

TABLE 1 対人機能尺度の平均と標準偏差

	道具的機能 獲得	情緒的機能 獲得	道具的機能 提供	情緒的機能 提供
父親との関係	11.70 (2.97)	10.96 (3.03)	10.05 (3.06)	10.94 (2.67)
母親との関係	12.27 (2.32)	12.44 (2.54)	11.47 (2.57)	12.15 (2.47)
友人との関係	12.58 (1.98)	13.68 (1.59)	13.00 (2.09)	13.51 (1.61)

カッコ内は標準偏差

また、父親と同居している113名と別居している40名のあいだで4つの機能尺度値の平均が異なるかどうかを検討したところ、ER尺度において別居群の平均(11.80)が同居群の平均(10.66)よりも有意に高く($t=-2.06$, $df=151$, $p<.05$)、また、有意ではないが、IR尺度において別居群の平均(12.35)が同居群の平均(11.47)よりも高い傾向が認められた($t=-1.85$, $df=151$, $p<.07$)。一方、母親との関係に対する評定においては、IR尺度においてだけ、有意ではないが別居群($n=33$)の平均値12.88のほうが同居群($n=120$)の平均値12.10よりも高い傾向が認められた($t=-1.72$, $df=151$, $p<.09$)。

さらに、出生順位に基づき、第1子($n=103$)と第2子以降に出生したもの($n=50$)の平均値を比較したが、父親との関係と母親との関係に対するすべての機能尺

度値のあいだに出生順位による有意差は認められなかった。また、いわゆる「一人っ子」($n=11$)ときょうだいがいるもの($n=142$)の平均値を比較したところ、父親との関係に対するIO尺度において、有意ではないが、「一人っ子」の平均(8.55)がきょうだいがいるものの平均(10.16)よりも低い傾向がみられた($t=1.70$, $df=151$, $p<.09$)。しかし、それ以外の父親との関係と母親との関係に対する機能尺度に関しては、「一人っ子」ときょうだいがいるものの平均値のあいだには有意差はみられていない。

一方、友人との関係に関してはどうかであろうか。最も親しい友人として自分と同性の友人を選択した135名と、異性の友人を選択した25名のあいだで機能尺度値の平均のあいだに違いがみられるかどうかを検討したところ、4つの機能尺度のすべてにおいて同性群と異性群の平均値のあいだに有意差は認められなかった(すべて、 $-1<|t|<1$)。また、同性を選択した135名に関して、各尺度評定値と、付き合い初めてからの年数とのあいだの相関を求めたところ、IR尺度においてだけ有意に近い負の相関が認められており($r=-.13$, $p<.07$)、付き合いの長さが長くなるほど、道具的機能を提供される割合が小さくなる傾向にあることが示された。

満足度について 満足度尺度に対する α 係数は、父親の場合が.95、母親の場合が.93、友人の場合が.84であり、いずれも高い信頼性が示されたので、項目得点の単純加算点をもって満足度得点とした。

父親との関係に対する満足度と、母親との関係に対する満足度の評定のあいだに違いが認められるのどうかを検討したところ、父親との関係に対する満足度の平均(19.71)は、母親との関係に対する満足度の平均(24.07)よりも有意に低かった($t=-8.25$, $df=152$, $p<.001$)。

また、同居・別居の別、第一子とそれ以外、一人っ子とそれ以外について、父親との関係に対する満足度、および、母親との関係に対する満足度が異なるかどうかを検討したところ、すべてにおいてこれらの評定値のあいだの差は有意ではなかった。

さらに、同性の友人との関係に対する満足度の平均(28.28)と異性の友人との関係に対する満足度の平均(27.40)とのあいだに有意差はなかった($t=1.55$, $df=158$, $n.s.$)。

友人との関係に対する満足度と、その友人と付き合い始めてからの年数のあいだとの相関は、.02($n.s.$)であり、つきあいの長さとの満足度のあいだには関連が認められないことが示された。

機能評定と満足度との関係 ここでは、4つの対人機能評定と満足度のあいだの関連が検討される。なお、以下の友人との関係に関する分析においては、サンプル数に偏りがあるため、友人として同性を選択した135名のデータだけを用いている。

第1に、道具的機能を提供することと獲得すること、および、情緒的機能を提供することと獲得すること、それぞれの関係に対する満足度のあいだの関係を吟味するために、満足度と4つの機能尺度値 (IR・ER・IO・EO) とのあいだの相関を算出した。ただし、この4つの機能尺度のあいだにも相互に相関が認められたので、これを統制した偏相関係数を指標として求め、TABLE 2 に示した。

TABLE 2 対人機能と満足度との偏相関係数

	IR	ER	IO	EO
父親との関係	.06	.45****	.09	.31****
母親との関係	.02	.44****	-.10	.36****
友人との関係	-.08	.21**	.30****	.12*

+ $p < .10$; * $p < .05$; ** $p < .01$;

*** $p < .005$; **** $p < .001$

IR 道具的機能獲得; ER 情緒的機能獲得

IO 道具的機能提供; EO 情緒的機能提供

父親との関係においては、ER と満足度、および、EO と満足度とのあいだにそれぞれ有意な偏相関が認められ (各々、 $r = .45, p < .001$; $r = .31, p < .001$)、また、母親との関係においても、ER と満足度、および、EO と満足度とのあいだにそれぞれ有意な偏相関が認められている (各々、 $r = .44, p < .001$; $r = .36, p < .001$)。すなわち、父親との関係、および、母親との関係においては、情緒的機能を獲得することがその関係に対する満足度と密接に関連しているばかりでなく、当の相手に自分も情緒的機能を提供することができると認知することもまた、その関係に対する満足度と密接に関連していることが示されている。

一方、友人との関係においては、ER と満足度のあいだに有意な正の偏相関が、IO と満足度のあいだに有意な正の偏相関がそれぞれ認められ (各々、 $r = .21, p < .01$; $r = .30, p < .001$)、また、EO とのあいだに有意に近い正の偏相関が認められている ($r = .12, p < .10$)。このことは、この友人との関係においては、情緒的機能の相互の交換がその友人との関係に対する満足度と密接に関連しているばかりでなく、この友人に対して道具的な機能を提供できうるかどうか、その関係に対する満足度

と密接に関連していることを示している。

つぎに、提供する機能と獲得する機能の相対的差と、その関係に対する満足度との関連を検討するために、獲得する道具的機能と提供する道具的機能の差 (IR-IO) と、獲得する情緒的機能と提供する情緒的機能の差 (ER-EO) を求め、この値と満足度とのあいだの偏相関を算出した。TABLE 3 に偏相関係数を示した。

TABLE 3 対人機能の獲得と提供の差と満足度との偏相関係数

	(IR-IO)	(ER-EO)
父親との関係	.02	.19**
母親との関係	.07	.06
友人との関係	-.18*	.04

* $p < .05$; ** $p < .01$

IR 道具的機能獲得; ER 情緒的機能獲得

IO 道具的機能提供; EO 情緒的機能提供

父親との関係においては、(ER-EO) と満足度とのあいだに有意な正の偏相関が認められており ($r = .19, p < .01$)、情緒的機能を提供するよりもそれを獲得する割合が多いことと、父親との関係に対する満足度との関連が示されている。しかしながら、母親との関係においては、(IR-IO) と (ER-EO) のどちらも満足度とのあいだに有意な偏相関を示していない (各々、 $r = .07, r = .06$, なに $n.s.$)。

また、友人との関係に対しては、(IR-IO) だけが満足度とのあいだに有意な負の偏相関を示しており ($r = -.18, p < .05$)、この友人との関係においては、道具的機能を提供するよりもそれを獲得する割合が小さいことが、すなわち、道具的機能をより相手に提供できうることが、その友人との関係に対する満足度と密接な関連を持つことが示されている。

さらに、提供する機能と獲得する機能の差の絶対的大きさと、関係に対する満足度とのあいだの関連を検討するため、提供する道具的機能と獲得する道具的機能の差の絶対値 |IR-IO|、および、提供する情緒的機能と獲得する情緒的機能の差の絶対値 |ER-EO| を算出し、この値と満足度とのあいだの偏相関係数を求めたものを、TABLE 4 に示した。

父親との関係、および、友人との関係において、|ER-EO| と満足度のあいだに有意な負の偏相関が認められている (各々、 $r = -.15, p < .05$; $r = -.18, p < .05$)。このことは、提供する情緒的機能と獲得する情緒的機能の差が小さくなることと、父親の関係、そして、友人と

TABLE 4 対人機能の獲得と提供の差の絶対値と満足度との偏相関係数

	IR-IO	ER-EO
父親との関係	-.05	-.15*
母親との関係	-.18*	-.15*
友人との関係	-.01	-.18*

* $p<.05$

IR 道具的機能獲得; ER 情緒的機能獲得

IO 道具的機能提供; EO 情緒的機能提供

の関係に対する満足度が関連することを示している。また、母親との関係においては、 $|ER-EO|$ と満足度とのあいだに、また、 $|IR-IO|$ と満足度とのあいだに、それぞれ有意な負の相関が認められている (各々、 $r=.15, p<.05, ; r=-.18, p<.05$)。このことは、情緒的機能と道具的機能の双方ともに、提供する機能と獲得する機能の差が小さいことと、母親との関係に対する満足度とが密接に関連することを示している。

討 論

ここでは、女子短期大学生にとっての対人関係の機能について、青年期の女子にとって重要と思われる父親・母親・最も親しい友人という3種の対象人物との関係を例にとって検討した。そして、それぞれの対人関係において獲得する道具的機能と情緒的機能、および、提供することができる道具的機能と情緒的機能という4つの機能が、その関係に対する満足度に及ぼす効果を吟味した。

分析の結果、他者から機能を提供されることばかりでなく、その他者に機能を提供することもまた、その他者との関係に対する満足度に影響をおよぼすこと、そして、この影響の仕方には、父親・母親・友人という対象人物の違いによって異なったパタンが見られることが明らかになった。すなわち、父親との関係と、母親との関係においては、当の親から情緒的機能を提供されることが、その親との関係に対する満足度を高めるばかりでなく、その親へ情緒的機能を提供できることもその親との関係に対する満足度を高めること、これに対して、最も親しい友人との関係においては、その友人から情緒的機能を提供されることが満足度を高めるばかりでなく、その友人に道具的機能を提供できることもその友人との関係に対する満足度を高めるという結果が示されたのである (TABLE 2)。

このことは、対人関係の成立や維持にとって、その他者の有する機能的意味ばかりでなく、その他者にとって自分が占めるところの機能的意味の認知のいかんが重要な影響を持っていることを示しており、相手から機能を獲得することと同時に、その相手に機能を提供できることもまた、その相手との関係に対する満足度を高めることを予想したわれわれの仮説は支持されたとして考えてよいであろう。

また、われわれは、問題において、相手から機能を獲得することを報酬としてみなし、その相手に機能を提供することをコストとしてみなしているならば、提供する機能と比べて獲得する機能が相対的に大きくなるほど、その関係に対する満足度は大きくなるであろうと予測した。しかしながら、TABLE 2 に示されたように、友人との関係においては、道具的機能を提供することができると思えるほど、その友人との関係に対する満足度も高まるという関連が示されている。このことは、相手に機能を提供すること、特に道具的機能を提供することを、単にコストだけとしてみなしてよいのかという問題を提出する。実際、獲得する道具的機能よりも、提供する道具的機能が相対的に大きくなるほど、友人との関係に対する満足度が大きくなるという結果が示されている (TABLE 3)。ただし、この効果は、父親との関係や母親との関係においては認められていない。これは、何ををもって報酬とみなし、何ををもってコストとみなすのかという判断の基準が、対人関係の違いによって異なっている可能性を示すものである。

友人との関係は、当事者あるいは当事者間の自発性に基づいて形成され、したがって、その関係の解消に際しても当事者たちの自発性が大きな決定因となっていると考えられる。そして、この点において、この友人との関係は、父親との関係や母親との関係とは基本的に異なった成立や解消の基盤を持っていると考えられよう。しかしながら、本研究の結果からだけでは、何ををもって報酬とみなし、何ををもってコストとみなすかの判断基準の相違が、この関係の成立基盤の違いに基づくものなのかどうかについては、結論できない。今後さらに検討が必要である。

終りに、本研究の問題点を指摘し、今後の研究の展開の可能性について言及したい。

第1の問題点として、本研究で用いた尺度の構成上の問題が考えられる。

実際の対人関係においては、他者は実に多様な機能的意味を有し、また、その他者にとっての自分の機能

の意味も多様なものであると考えることができる。しかしながら、本研究においては、尺度の構成に際して、対人関係におけるそれぞれの機能の極めて限定された側面だけしか扱わなかった。これは、父親・母親・友人という3種の対象人物との関係の違いを直接に比較検討するため、この3種の対人関係に共通すると考えられる機能の側面だけをとりあげたことによるものである。したがってここでは、例えば、「食事の世話をしてくれる」といった主として母親に特徴的な機能の側面や、「生活のための収入を得る」といった主として父親に固有の機能といった側面はとりあげられていない。また、実際、一部の対人機能尺度の信頼性も十分に高いとはいえない。今後、より信頼性・妥当性のある尺度を設定して再検討する必要があるだろう。

また、これに関連する問題として、ここでは、対人関係の有する負の機能については直接検討しなかったことをあげなければならないだろう。実際の対人関係においては、他者あるいは自分の有する機能的意味は、必ずしも肯定的なものばかりであるわけではなく、他者は否定的な側面の機能を有することもまた少なくないと考えられる(Rook & Pietromonaco, 1987)。ただし、他者や自分の有する否定的な機能の提供や獲得が必ずしもその関係に対する満足度を低下させるばかりではないことを示唆する研究もあり(Braiker & Kelley, 1979)、このメカニズムも今後、解明すべき重要な課題の1つであろう。

さらに、各々の関係がおかれている状況や場面によって対人機能の提供や獲得の満足度におよぼす効果が変動しているという可能性が示されている(Leik, 1963)。父親・母親・最も親しい友人のそれぞれに対する関係においては、その関係のおかれている状況や場面が異なっている、あるいは、そこで解決すべき課題の構造が異なっていると考えられ、今後、このような状況要因を加味したかたちで対人関係を理解する枠組みが必要となろう。

最後に、ここでは女子の短期大学生だけを対象として調査を行っている。上述の結果が、女子青年だけに固有の特徴であるのかどうかを結論するためには、異なったサンプルなどによって検討する必要がある。

本研究の結果は、対人関係の理解に際しては、他者の有する機能的意味と自分がその他者に対して占めるものの機能的意味の双方を同時に考慮する必要があることを示している。ただし、これは、極めて認知的なレベルの意味づけの問題としてとらえられたものであり、この認知的なレベルの意味づけがどのように具

体的な行動として出現されるのか、すなわち、認知レベルと行動レベルの相互関連がどのようなものであるかについては、今回は検討しなかった。上述のいくつかの問題とともにさらに検討する必要があるだろう。

引用文献

- Bales, R.F., & Slater, P.E. 1955 Role differentiation in small decision-making groups. In T. Parsons, & R.F. Bales (Eds.) *Family, socialization and interaction process*. Glencoe: Free Press. (橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳 家族 黎明書房)
- Braiker, H.B., & Kelley, H.H. 1979 Conflict in the development of close relationships. In R.L. Burgess, & T.L. Huston (Eds.) *Social exchange in developing relationships*. New York: Academic Press. 135—168.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 5, 117—140.
- 飛田操 1986 悩みの相談からみた対人依存の発達について 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 418—419.
- 飛田操 1987 女子短期大学生からみた父母関係の機能 文教大学人間科学研究, 9, 23—30.
- Homans, G.C. 1974 *Social behavior: Its elementary forms*. New York: Harcourt, Brace. (橋本茂訳 1978 社会的行動 その基本形態 誠信書房)
- 今井芳昭 1987 影響者が保持する社会的勢力の認知と被影響者の認知・影響者に対する満足度との関係 実験社会心理学研究, 26, 163—173.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ, 14, 日本心理学会
- Leik, R.K. 1963 Instrumentality and emotionality in family interaction. *Sociometry*, 26, 131—145.
- 永田照子 1985 相互依存の系としての家族—家族の結合の要因— 東京工芸女子短期大学『飯山論叢』, 2, 78—89.
- 永田良昭 1961 対人関係の次元に関する研究 教育・社会心理学研究, 2, 160—173.
- 永田良昭 1973 情緒的魅力および資源の大きさの類似性からみた学級集団の対人関係の構造 実験社会心理学研究, 13, 105—115.
- 永田良昭 1987 子どもの自発性と人間関係 伊藤隆

- 二・坂野登(編) 入門子ども心理学1 子どもの自発性と学習意欲 日本文化科学社 91-119.
- 小野寺敦子 1984 娘からみた父親の魅力 心理学研究, **55**, 289-295.
- Parsons, T., & Bales, R.F. (Eds.) 1955 *Family, socialization and interaction process*. Glencoe: Free Press. (橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳 1981 家族 黎明書房)
- Rook, K.S., & Pietromonaco, P. 1987 Close relationships: Ties that heal or ties that bind? In W.H. Jones & D. Perlman (Eds.) *Advances in personal relationships*. Vol. 1. London: JAI Press. 1-35.
- Rusbult, C.E. 1980 Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of the investment model. *Journal of Experimental Social Psychology*, **16**, 172-186.
- 佐藤寛之 1987 認知対象に期待する機能と対人認知構造との関係について 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 466-467.
- 高木英至 1983 対人関係分析への一視角 -他者の機能的利用- 埼玉大学教養学部紀要, **19**, 1-37.
- 高木英至 1984 対人関係の利用と満足 -社交性定量観念の検定- 社会心理学評論, **3**, 16-29.
- 高橋恵子 1968 依存性の発達的研究: I 大学生女子の依存性 教育心理学研究, **16**, 7-16.
- 藪内稔・渡利篤司 1974 地域社会における援助源としての社会的地位 -投入-産出分析の一応用 -島根大学山陰文化研究紀要, **14**, 123-140.

謝 辞

本論文の作成にあたり御指導を賜った学習院大学文学部 中村陽吉教授, 永田良昭教授に厚く感謝いたします。

(1989年8月10日受稿)